

下伊那郡泰阜村の村長の松島貞治です。この研修会は、ここ下伊那郡には 14 市町村があるのですが、交代で一応、市町村長から講話といいますか、話をすることになっていて、今年は私が当番だということになったわけですので、話をさせていただきますが、まず自己紹介。今、紹介にもありましたが、私は高校を卒業し、たまたま大学の試験に落ちたりして、家にいたのですが、家にいて二月くらいいたら、「役場に手伝いに来てほしい」と言われ、臨時職員といいますか、臨時で行ったのです。そうしているうちに、「役場で働け」ということになって、臨時の期間は頑張ったのですが、役場で働いたので、試験を受けて採用された職員ではありません。そのため 20 年たったときに、いろいろな事情といいますか、話せば長くなるので話しませんが、一度泰阜村役場を退職し、ちょうどこの 5 階にある下伊那郡町村会という事務所がありますが、一部事務組合という組織で作っていますので、公務員の身分は変わらずに、役場を退職してこちらの、正式名称は下伊那郡町村公平委員会組合という一部事務組合に身分を移して 4 年間働き、これはいろいろな事情の中で、お世話になった方と選挙をすることになり、私は 44 歳のときでしたが、村長選挙に立候補し、たまたまといいますか、村を二分した激しい選挙でありましたが、当選し、それから 20 年。今、村長は 21 年目になっていますので、公務員しか知らない人間です。民間から上がった村長さんたちから、「公務員出身で、公務員しか知らん。弁当だけ持って行って、給料をもらい、世の中の苦しさを知らん、だめなやつだ」という話をいつもされているのですが。

ということで、公務員しか知らない人生でしたが、私が村長になったころは 20 年前、バブルが実ははじけていたのですが、まだこのあたりはバブル景気で、行け行けドンドンといったような時代で、長野県も長野冬季オリンピックに向け、いろいろな基盤整備が進むころで、大変活気がありました。有力な政治家がいて、県にも頼まなければいけないこともいろいろたくさんあり、そのときに大変お世話になったのは、今日、先ほど話をされた、山本現研修センターの所長ですが、3 月まで県の部長さんでおられましたけれども、大変ご厄介になった山本さんも退職する年になったのだなど、私ももう 60 を超えたので、今お顔を見ながら懐かしく大変思っていますが、そのような人生を送ってきました。

今日皆さんにお話ししたいことは、最後はいわゆるはみ出し公務員になってほしいと。「はみだし刑事」という、けっこうヒットした刑事番組もありますが、はみ出し公務員というものは、これは捉え方が難しいのだけれども、要するに、いわゆる役所のこのような制度や決まりの中だけで、まじめに働いて大過なく過ごすという公務員ではなく、住民のため、市民のため、この地域で生きている人のため、本当に私利私欲を捨て、どこかで、例えば法律やいろいろな制度の殻を破ってでも、その人たちの幸せのことを考えてやろうという、そのような思いを持った。また、そのようなことができる公務員に最後はなってほしいということを思っています。そうでなければ皆さんが幸せになっても、住民が幸せにならないということです。村長や役場の職員は幸せになったけれども、住民が不幸せということが一番困るのです。ということを見ると、やはり最後は、はみ出し公務員という

ような公務員になってほしいと思っていることが今日の話の結論です。しかし、最初からはみ出すわけにはいきません。よく、学校の授業などを見ていると、応用問題があるのだけれども、足し算と引き算ができぬうちに九九などをやっても、理論的にわかっていないので、暗算するだけでだめなのです。ということと同じように、役所の仕事は、きちんと勉強して役所の仕事というものを心得て、役所の仕事の限界をわからなければ、どこからはみ出しているのかどうか解らないということがあるので、基本的にはまず基本をしっかり勉強してもらわないと、はみ出し公務員にもならない。最初から応用編に行くということは無理だということを、よく考えていただきたいと思っています。

村長と職員が、今日はうちの職員も来ていますけれども、最初ときは私の前で宣誓書を読んだり、私が話をしたりしますけれども、それから以後、直接話をするなどということはそうそう、私のような小さな役場でもなく、上司の話を聞いたり、同僚と話をしながら仕事をしていますが、去年入った職員が3カ月くらいたったあるときに、スピーチのときにその女性職員が話したときに、私は「なるほどな」と思ったのですが、皆さんは入って二十日くらいするので、役所は物を買ったり、お金を払うときに、私たちのときは伝票と言って、今は何と言っているのか、伝票と今でも言っているのですが、あの伝票に、例えば1万円のものを買ったときは、1万円支出するための伝票を作るのですが、われわれの時代は「伝票を切る」と言ったのです。伝票を切ることは役所では当たり前で、物を買って1万円払うときに伝票を切る。女の子が役所に入って、「伝票を切って」と言われたので、はさみを持って用意したというのだけれども、少し時間がたつと、皆、先輩たちの職員は笑うのだけれども、役所用語ではそのようなことを言うのです。例えば、伝票を切るなど。そのようなことがわからないと、はみ出す意味もわからないということなので、基本的にはしっかり役所の仕事をした上で、役所の仕事の限界を知って、限界を1歩乗り越えられるかどうか、本当に自分が公務員として働いた成果があったのかどうかということだと思っています。

以下、私が役所の中でずっと感じてきたことをいろいろ、これから時間内にお話ししたいと思っていますが、面接試験というものをやります。私も試験官になり、面接試験をやるのだけれども、皆さん履歴書にも志望の動機という欄があり、だいたい書いてある。「別に働きたくはないけど、働かにならん」と書く人は誰もいないと思って、このような動機で、このような考え方で、このようにしたいと。面接試験をやっても、だいたいそうのようにきちんと、「どうして公務員を志望されましたか」という話で、「これこれこうだ」と書いてきます。しかし、私などはよく「人を見る目がない」と言われているので、基本的に性善説に立っているので、「だいたい、人は皆いい人ではないか」と思っているのですが、よくわかりません。町村長たちと話をして、多くの方が「1回の面接ではわからんね」と。「3日くらい面接をやって、2晩くらい飲んで話をしたらわかるのだけど、だいたいわからない」というのが、われわれの話。そのようなことを経験して見ておりますが、レジュメにも書いてあるのですけれども、いろいろな理由がここにあります。それぞれ理由をつ

けるのですが、基本的には「何となく」というような理由で、私は「何となく」ということは、このごろ、悪いとは思わないようになりました。一番困るのが、「大学で専門的なことを勉強してきましたので、その専門知識を生かしたいと思います。」ということがどうも一番問題ではないかというのが最近の私の感想です。大学で専門知識を学んだというのだけれども、地方自治法を学ばれた、何かいろいろ学ばれたなど、それはそれでいいのですが、何か最初から専門家になってしまい、専門知識を身につけたというような方が一番困るのかなと思っています。

介護福祉士という資格があるのだけれども、今度、研修制度になってしまうので、今、長く3年以上介護を経験した方が介護福祉士の試験を受けて介護福祉士になります。福祉の経験、2級ヘルパー、1級ヘルパーという制度もなくなるのですが、介護の経験を積んで、介護福祉士の試験を受けて、受かりましたと。受かった途端に、昨日と今日と、何も違うわけではないのですね。しかし、われわれは介護福祉士の試験に受かったときから急に、何か介護の専門家になったような気持になるだけの話で、実は何も昨日の自分と変わっていない。ただ、たまたま試験に受かっただけで。そのあとが問題なのです。例えば、私も特別養護老人ホームの管理者を長く、うちのやすおか荘の。社会福祉協議会の会長をやったりして見えますけれども、基本的には介護福祉士という人が何人かいないと、要するに請求するときに、加算というものが取れずに収入が減ってしまうので、介護福祉士よりも数が必要だし、専門的な知識を持った方が多いということはいいのですが、現場で見えておきますと、うちのお母さんを20年間介護してやってきましたというおばさんの方が、うちの村の介護福祉士より、若い介護福祉士の試験を受かった人より、よほど介護は素晴らしいと思うことが、たくさん世の中にはあります。それと同じように、大学で専門的な勉強をされたということは非常にいいことだし、それを否定するわけではありませんが、「いったん、そのような余分な考え方は捨ててもらった方がいいな」ということが、私の長い公務員生活の中で感じていることの一つ。

そしてもう一つは、おそらく皆さん、二手に分かれるかもしれない。先の、将来性のないような話をして申しわけないのだけれども、「公務員は安定しているし、何か自分のやりたいこともできそう。趣味も含めて」と思っている方がおられるかもしれません。例えば大きな市で、共働きで、奥さんと旦那さんが一緒に、事務で結婚してしまったときに、それは法律上、別に何の問題もないのだけれども、一応世間の目もある……。このようなものを世間の目と言うのだけれども、目もあるので、「課長発令はしない」というような歴史もあるのです。そうはいつでも、年も来たので、奥さんかどちらかが辞め、課長に昇進するという時代にもなった。そのときに選択は二つです。奥さんと、課長にもならずに係長あたりでよくて、2人で稼ぎ、それでも楽しいことをやり、収入があった方がいいというのも人生。しかし、「俺はせつかく公務員として就職して、自分のやりたいことをやるのに、課長ぐらいにはやっぱりならにやいかんで、どっちか辞めろ」と言い、奥さんに「辞めろ」と言えば、奥さんが「あなた辞めてよ」と言って、辞めて課長になる。奥さんや旦那

那さんは、辞めたい方が民間で働き、公務員の給与をくれなくてもやる。しかし、片方は課長になっている。どちらがいいのかということは、あなた方が自分で決めることなのだけれども、だいたいこのように分かれる。

それと、だんだんこのようにやってきて、「俺はもしかしたら、何か課長や部長とかになれんな」というようなことになる。なぜ課長や部長になれないことがだめなのかというのはこのあと話をするのだけれども、もし、本当に自分の思いを実現しようとする、公務員の場合は、トップになることが一番です。泰阜村のときは、いろいろな職員がいるのだけれども、「こんなトップのもとじゃ働けん」と思ったら、自分がトップになる以外ないのだけれども、「こんな上司の下では、こんなことじゃよくない」と思いながら働かなくてはいけないことが、皆さんこれからあるのだけれども、しかし、自分がこの立場でこのようなことをしようと思ったら、その立場にならなければできないということが、やはりこの世界にはあります。そのときは、その立場になる必要があると思ったら、そのような上から、上からといますか、要するに認められる職責を積んでいかなければならない。しかし、それも途中で「どうも、俺、だめだ」と思って、趣味に走ってしまう人もいます。となると、学校の教員などは特にそうですね。あの世界の人事も非常に問題だと思っただけなのですが、「もう一生、平教員でいい」という人と、「せめて教頭と校長になって」などと思うと、それなりに頑張るようになる。しかし、諦めてしまったら、自分の趣味を生かして、先ほど言った「はみ出し公務員になる」というようなことは別に、余分なことをしなくても、きちんとやっていけばいいというようになるか。これもだいたい、二つに一つの道を。しかし、公務員として目指した以上、やはり自分の人生は楽しかったというだけでいいのかどうかという思いを常に持っていないと、住民のためにならないということを思っています。

という私も、趣味があるのです。私は弓道が本職で、ずっと弓道をやってきました。私は役場職員時代も弓道で、一応国体の成年男子の選手になったこともありますが、当時は仕事をしながら、ほとんどアフターファイブは弓道だけという時代も過ごしてきました。今でもやっていますが、それはそれで、仕事以外の時間をどのように過ごすのかということも大事なことではあるのだけれども、趣味を否定しているわけではないのだけれども、趣味があっても、基本的にわれわれの仕事はそのようなことだと思つと、やはり安定しているし、何か収入もありそうで、公務員なら一生何とかかなりそうだという考え方や、専門知識や学んだものを生かしたいというような思いは捨てた方がいいと思っています。私がそこに書いてあるとおり、「何か俺、一生懸命学んできた。専門知識を生かせない」と言っても、それほど専門知識を生かせる仕事ばかりがあるわけではないということ。それから、妙に「頑張らにやいかん、頑張ろう、頑張ろう」と思っていることも、「毎日頑張ろう」ということも、それは苦しいことです。一番大事なことは、「頑張れるときに頑張らにやいかん」というような人ですね。それから、やはり基本的には素直な心を持っている人が一番だと思っただけです。1回、役所へ入ったら、頭の中を空っぽにし、真っ白にし、いろ

いろなものを吸収できるというような思いで役所へ入ってもらった人が「一番、やっぱり将来、柔軟性もあって、いい公務員になっていくな」ということを思ったりしています。

学生でも勉強してきたのだと言うのだけれども、今かなりいろいろなことを、現地に出ても実践はされていますが、現実の社会というものは、学生時代とやはり違うのです。例えばそこに書いてあることを何点か言うと、国民には納税の義務があるということは皆さん教わって、みんな知っていると思う。税金は納めなければならない。しかし、今、長野県も、泰阜村も含めて各自治体に、税金は課税したけれども納めない人がたくさんいる。納めないという言い方はおかしい。納めない人もいるし、納められない人もいるかもしれない。さて、どうするかといったときに、「その納めない人が悪い」という、それは学生時代の答えだと思う。それは納めない人が悪い。しかし、どうしたらいいと思いますか、税金を。今日も、うちの職員は、5月31日は出納閉鎖とあって、このあと、話があると思うけれども、1年間の単年度の会計をやっているの、4月に始まり3月31日で1年間の会計が終わるのだけれども、5月まで出し入れは前にさかのぼってできることになっているのだけれども、近づいてくるので、滞納整理に行く。納めてくれない人に、納めてくれと言うことを、滞納整理という言葉を使っているのですが、行くと言っていました、現実には起こるのです、納めてくれないことが。どうしますか。これを納めてくれない人は、では、財産を差し押さえて納入という手続きがあるのだけれども、手続きの仕方を学んだとしても、「いや、ちょっと待ってくれ」と言われたときに、どうしなければいけないのか。したがって、「税金は納めるべきだ」という学問と、「納めなければならない」ということと、「納めないやつが悪い」ということは全部、言っていることは正しいのだけれども、現実にはそのようなものに向き合ったときに、どうするか。

最近、収入がなくて大変だという人がいて、キャンピングカーのような車に乗り、住所はどこかにあるかもしれませんが、渡り歩いてしまい、食べていけないという方も、所得がなくてという、二極化でおられるというのですが、義務教育は受けてもらわなければ困るのだけれども、われわれは中学校までは、泰阜村にいる該当年齢者は義務教育を受けさせなければならないのです。しかし、行ってみたけれども家にいない、あるいはお金がなくて学校を出せんのだけれども、学校に行っていない人は日本全国に多数いるのだけれども、その人のところに行ってみたら、うちの村の住所だけれども、その人はいないので、うちは知りませんという。義務教育を受けさせなければならない村が、その人にそれでいいのかどうか。いいのかどうか。これは考えても結論は出ないのだけれども、このようなことがたくさんあります。それから、実際の仕事の中で私は、飯田市が公民館主事ということで、旧は17。上郷、鼎まで入れると、もう少しふえるのでしょうか。17の昔の村が、例えば飯田市だと、千代村や、龍江村、三穂村などが合併してある。そこに支所があって、公民館主事ということで、市役所の職員を出すのです。公民館主事は大半、夜につき合わなければいけない。私はあれが、飯田市の職員を成長させていると思っています。

用地交渉というものをしなければいけないのです。皆さんは役所の職員になり、例えば

あそこに道路をあげるという話をしても、道路の設計技術を学んできた人は、道路を設計できるかもしれません。このように開ければできる。その設計はこのようにすればいい。橋はこのような橋……。橋までは無理でしょうかね。道路。7メートルの幅員なら、7メートルの幅員。その前に、その用地を、泰阜村なら泰阜村の、飯田市なら飯田市の市有地に買い上げて譲ってもらわないと、道路の工事はできないわけです。一番の問題は、その用地を譲っていただけるかどうかという話をすることが役所の一番の仕事。道路を作ることは別に役所の仕事ではなく、それは業者に発注すれば済むこと。一番大事なことは、用地交渉というような話をしなければならぬ。そのときに「だめだ。そんなの、俺は売れん」と言ったときに、「はい、わかりました」と言ってきてしまったら、その道路はあかない。山本さんたちが大変だったといいますが、頑張った時代に、長野まで、長野オリンピックの新幹線があいたのです。今は長野新幹線が通っていますけれども、あの用地の仕事などは、県の職員皆で頑張ってやったのだけれども、あれだけ短時間で、あれだけの用地交渉をまとめ上げたのは、ものすごいエネルギーです。ものすごいことです。でも、新幹線ができたのはレールを敷いて、その土地交渉が大変だった。これが、役所の仕事でいくと、そのような交渉をどう交渉したらいいのかということは、大学では教えてくれない話です。このようなことを、私たちは毎日、毎日やらなければいけないということです。

それから、「褒めて育てよ」と言うのだけれども、私は職員を怒るときに、なるべく目の前で怒るようにしています。「ふざけるな」という話、これはよくないという話もあります。「村長、個別に呼んで怒った方がいい」と。私は個別に怒ることはほとんどありません。基本的に、「人間はそんなに悪いやつはおらん」と思っているのですが、例えば誰かが、一生懸命やったけれども失敗してしまったことには怒らないようにしています。最近このようなものは皆ワードで打つので、このあと、文書の話があるのですが、去年の文書の日付だけ変えて同じものを出すという時代になってしまった。昔は全部書いたのですよ、新しく。それで間違えるのだけれども、そうすると、平成27年4月23日なのだけれども、平成26年4月23日といって文書が配られる。「ふざけるな。こんなの、何だ、日付まで間違えて」と怒りたいのだけれども、そのようなことはあるだろう、間違いかなどは。しかし、横着といいますが、要するにやるべきことをやらないというときは怒る。怒るときには、私の机の前で、私は事務室に机を置いているので、そこで怒る。それは、要するにこのようなことは怒られるということを他の職員にもわかるようにするために、そのように怒っているのですが、褒めて育てるといふことがあり、褒めてくれるといふことは、皆さん……。私は「褒めない村長」と言われているのです。めったに私は褒めません。課長たちは褒めているかもしれませんが、たまにはある、本当によかったというとき。もう、褒めてくれる世界などは、社会人というものはそのような世界ではないということ、よくよく心得て。「褒めて育てよう」と言うけれども、シンクロナイズドスイミングの井村コーチがまた帰ってきましたけれども、井村コーチの話を聞いても、ものすごいですね、話を聞いただけでも、厳しくて。あのくらい、要するに目標が決まってやるとなったら、あの

くらい、やはりやらなければだめだ。

私は野球大好き人間ですが、たまたま東北楽天イーグルスの大久保監督に 20 年前にちょうど野球教室を頼み、その後、交流があり、ずっと野球教室を頼んでいるのです。野球の世界は厳しい世界です。昨日テレビを観た方は、今日も職員の話をしてきたのですが、ダイエーホークスにサヨナラ負けしてしまったのだけれども、野球の世界も褒めて育てる。褒めて育てるといえることは、少なくとも大学生までといたしますか、子供の時代だと思っているから。社会人で褒めて育てるなどとは、本当に頑張ったときにはですが、私は、それは頑張ることは当たり前だと思っています。私は今、楽天イーグルスも応援していますが、私たちの野球は広島東洋カープだと言っているのです。お金がないので、泰阜村という村は。ジャイアンツやダイエーのように、フリーエージェントになった高い選手を獲得できるわけではない。そもそも、例えば県職員を受けたのだけれども、県職員は受からずに残念でした、それでどこかの公務員で、たまたま泰阜村が受かったというような、「ような」と失礼なことを言ったらだめだけれども、そのような人たちが入ってくる中で、それを鍛えてジャイアンツに勝つようなチームを作るのが広島東洋カープ。となると、私たちは現有勢力で、東京と言うと大げさだけれども、少なくとも大都市の他の町村にも負けないような、組織にしなければいけないということを思うと、やはり頑張らなければいけない。「よく頑張った、頑張って」と言うのではなくて、「だめなことはだめだ」と、やはり言うて育てることだと私は思っている。それから、「この村長はこういうことに対して怒るんだ」と皆に知らしめるために、なるべく人前では怒るようにしていますが、褒めてくれることはない社会だと思って働いていただきたい。

それから、親やおばあさんたちが出てくる、このごろ。私たちのときにはそのようなことはなかったです。私の長男が、ある民間の金融関係の仕事で働いていますが、そのこの偉い人と話をしていると、何しろ夜の宴会が長くなってしまい、いつも運転手をさせられ、帰りが遅くなって困るというような話を親がしてくる。俺は「本当ですか」と言うのだけれども、そのような時代だと。この間、うちの役場で雪が降ったら母親が「雪道が初めてで、娘が転んじゃうともう心配で、もう帰ったでしょうか」と電話があり、私は職員に「そんな電話、切っちゃえ」と言ったのだけれども、そのような時代です。それで皆さん、役所で課長に怒られたなど、何かがあり、親やおじいさんやおばあさんが出てきて、部長に「いや、うちの子供を余り怒らんようにしてくれ」などと言われることが、いかに恥ずかしいことかということをよくよく考えておいていただきたいと思います。二十歳を超えて、少年法がどのようなになるかはわかりませんが、18 歳で選挙権を与えるという時代に、もう一人前なのだ。あなた方自身が責任をとるべき世の中で、親や祖父母が出てくる。学校は保護者ということなのでいいのだけれども、少なくとも、そのような社会ではないということをつくづく。ということは、普通、われわれの時代は、仕事で大変だったなどという話を、親にはしないということです。親が何か言うということは、大変だということをお親に話している。それはいい親子関係と言うのかもしれませんが、あなた方はもう、あな

た方自身が社会人として一人前になるということは、自分で責任をとる。そのようなことだと思います。

それから、最近の公務員ということで、その後ろ側になるのでしょうか。私が村の職員を見ていて思うことですよ。全部の職員を見ているわけではない。他の町村長の話の聞いても、「まあ、そうかな」と思うこともあるのですが、私はわざわざ、このあと、文書事務の講義があるというのだけれども、今日、自分の机の中から、このようにびろびろになっているけれども、この本を持ってきた。何という本かという、「起案例文集」という。文章の基本が書いてあり、このようなときにはこのような文章を作ると。私は村長だけれども、今でも、大事にということもない、ほとんど見ることはないのだけれども、持っています。われわれが公務員になったころは、このようなものを自分で持つことが当たり前だった。文書事務の手引きというものがあり、これも配られた。今はこのようなことより、何か人間として、授業で言うと道徳授業のようなことばかり、このように話がされる。コミュニケーション能力などと。先ほどのコミュニケーション能力といっても、用地交渉で「この土地をどうしても売ってくれん」というものを「売ってくれ」という話のときに、「コミュニケーションの勉強をしてきましたので、あなたにこう言われたら、こういうふうに答える」などという、本に書いてあるような話でできるはずもないのだけれども。ということで、しかしそのような勉強の方が多くなっている。本当は、それはもっと人間らしい接し方があると思うところです。それから『自治六法』というものは、私たちは当たり前で今も持っていますが、しかし、今の連中とといいますか、職員は持っていない。何かというと、画面を見るのです。皆さんはおそらくまだ入って二十日くらいなので、行ったけれども、「今日は何をしますか」と言い、上司は忙しいけれども、自分は何をしたらいいのかわからないというときがあるかもしれません。昔は、私たちが入ったところの上司は、法律を読んでないと、「こういうの、読んどけ」と言って怒られたものですが、そのような時代だったのです。それで、見ておると、「勉強しんな」というのが、私の第一印象。

それから、すぐに聞く。これは、私の場合は、山本さんと親しいもので、そのように使わせてもらうのだけれども、たくさん経験がある、県の皆さんは。今の町村の職員、もちろん村の職員だと、わからないことがあるとすぐに聞くのだ、中央事務所へ電話して。少しは調べろよ。聞くことは、なぜだめかといったら、ささいなこと。要するに、聞かれた方はきちんと答えなければいけない。今からもう何年前でしょうか。二十何年前に介護保険法という、ものすごい大制度改革があったのです。皆さんはもう当たり前なのだけれども。平成 12 年。そのときに「これはどうですか。あれはどうするんですか」と言い、私はそのときに、厚生労働省の仕事をされた事務方のトップの方の話聞いた。その方が「町村の皆さん、余分なことは聞かないようにしてほしい。介護で住民のためにいいと思ったことは、聞かずにやってほしい。われわれだって」、要するに厚生労働省の事務方のトップが「住民のためにこういうことをしたいといって、介護で丁寧というか、いいサービスをやってくれるのを、だめなんて、われわれが言いつこない。しかし、聞かれれば法律



上、それはだめですということになる」。どうしても、これをやらなければいけないという事は、やらなければいけないのです。聞いて「だめ」と言われたら、できないではないですか。

このような話をしてしまっているのかどうか分かりませんが、今、有害鳥獣という問題があり、熊は捕っていいかどうかというと、法律的には市町村長の許可で熊を捕る。イノシシ、鹿は今、皆で捕っている。鹿は今の期間でも被害があるので、猟友会に、「鹿を捕ってください。イノシシも捕ってください。猿も捕ってください」。熊だけは自然保護団体からいろいろ意見があるので、調整するのです。調整といいますか、県にお伺いを立て、「熊の許可を出してください」と言い、県が、「もっと出せ」と言っても、「とりあえず1頭にしてください」などと言って。しかし、熊はそのようなことで許可制、一応許可になっているので、許可がないと捕ってはいけません。しかし、イノシシや鹿のわなに、熊がかかってしまうときがある。これは正しくは、鹿やイノシシのわなに、熊を捕ってはいけませんので、熊がかかってしまったときは連絡して、そうすると、今ここにあるのですが、建物の中に麻醉銃というものがあり、麻醉銃で眠らせてお仕置きをして、どのようなお仕置きをするのか知りませんが、唐辛子でもまくのでしょうか、お仕置きをして帰してしまうのです。これが正しい手続きなのです、これが。

何年前か前に、私の村で熊がかかってしまい、ちょうど熊の出没情報があったときなので、どうするかという話のときに、離しても、もうこれは危ないので、仕方なく「じゃ、射殺しよう」と。人に危害を加えそうだったので、猟友会の会長さんと話をして射殺して、それから報告した。「人に危害を加えそうだったので、射殺しました」「あ、そうですか」と、これで1件終わるのです。この熊の対策は、今言ったとおり二つの方法が、二つではなくて、正しくは前に言ったことが正しいのですよ。もしかしたら、私たちが「人に危害を加えそうだ」といって射殺したことはいけないのかもしれませんが、でも、そのときの判断として、私はそれが泰阜村のためによかったと思っています。お仕置きしても、結局よく調査すると、やはり帰ってきてしまう、ということがある。わからないと、何もかもすぐ聞くのだけれども、「いくらかは自分でも考えろよ」と、最近の職員によく言いたいのです。聞かれた方は、聞かれた者が勉強になるのです。聞いた者は勉強になっていないという印象を持っています。今皆さんにしている話は、同じ話をしているのですよ、私は村の職員に。皆「はあ」、村長の話なので、聞かないわけにいかないの、聞いたような顔をしているのだけれども、あまり改善された感じは受けていませんが。

それから、皆さん公務員試験に受かり、勉強してこられたので、文章を書くなど、いろいろなことができると思っているのですが、読んでもわからない話、読んでもわからない文章がある。今日、基礎的なことを勉強しているので、本当に勉強してほしいのですが、例えば水を買えば100円や120円の話だけれども、いくら120円の水でも、公金といえますか、皆さんが役所からお金で買うときは、理由と目的がなければ、ただ「水を買います」と言って公金を、皆さんの大切な税金を使うわけにはいかないのです。コップ1個で

も、そうです。ボールペン1本でも、そうです。目的がなければ。何に使うのか。口を酸っぱくして言うのだけれども、わからない。何のために。「ボールペン1本買いました」といっても、自分のためのボールペンを買っても、それではだめ。「これこれこのようなためにボールペンが必要です」。だんだん横着になると、そのようなことになる。そのような基本がやはりわかっていないと困るのです。

せっかく皆さん勉強したので、字は、私は高校を卒業は一応したので、それほど知識ありませんが、住民から、たまにはクレームがつくのです。例えばこれは通称、何という。「さくぶつ」と読んでもいいのだけれども、「さくもつ」と通称は言いますね。これはここに「農」がついている。うちの広報で、「明日は霜がきそうなので、『のうさくもつ』に注意してください」と言ったのです。そうしたら、賢い住民もいるのです。これは「のうさくもつ」ではない。これは「のうさくぶつ」と読むのだと。NHKのアナウンサーは絶対に間違えないですね。「のうさくぶつ」と読みますね。これは中学くらいまできちんと勉強していたらおそらくわかる話で、皆さん大学を卒業している人が多いと思うのだけれども、大学を卒業して、このようなものが読めないということは問題なのですよ。何を勉強していたのかと。よく役所で、最近、漢字が出ました、このようなものが。「あいころす」と。では、コップと水を「そうさつ」するか。これは「そうさい」と読むのだけれども。ということから始まり、このようなことをすると切りがないのだけれども、今、日本語は難しいですね。私のところは今、村会議員の選挙ですが、遊説とは「遊ぶ」に説明の「説」と書いて「ゆうぜつ」と言う。あれは「ゆうぜい」と読む。これは「そうさつ」ではない、「そうさい」と読むということがあり、そのようなものを、「公務員試験に受かってきておるんで」と言っても、しかし、われわれでも日々、わからない字をこのように勉強しなければいけない。したがって、要するに日々勉強だということです。少なくともわれわれ、税金から給料が出て、税金を使って仕事をしているということは、目的や理由がなく公金は使えないということを心において下さい。最近私の役場で感じていることは三つ。「あまり勉強しないな」と。「すぐ聞く」、それから「目的や理由がわからん。文章がきちんと書けんなあ」ということを感じてきました。

また、よく最後のところで、これからの仕事のこと、一番先に言っておきたいことは、初期対応がすべてを決めるということです。初期対応、最初の対応。ほとんど、うちで最近の訴訟といえますか、訴えられた、お金を払ったけれども、特別養護老人ホームであったのです。夜中に人が亡くなるので、しかし、特養というのは入るときに、「何か急変して、こういうことがあっても」と、だいたい了承してもらっているのだけれども、しかし、普通は起こるはずがないのだけれども、実はそれは夜中に亡くなっている。12時に行ってみたら元気だったのだけれども、朝の4時に行ってみたら亡くなっていた。行って連絡し、「あ、そうですか」と飛んできた。そのときに、きちんと所長など、対応すべき人が事情を説明し、「これこれこうで、一生懸命やりました。こうだ」と説明する人もいなければ、ヘルパーしかいなかったなどと。そのようなことは最初にきちんと対応しておけば、この

ようなことにはならなかった。後々問題になり、このようにいろいろ起こるものは、ほとんど初期対応がまずい。まずいということは、例えばいきなり「すいません」と言えはいものでもない。「すいません」と謝ることが初期対応ではありませんよ。一生懸命対応してやるということです。「そうですか。じゃ、何とか」と。皆さん若いので、自分でわからなかったら、上司に聞いたりしたりする。基本的には、一生懸命聞き、一生懸命対応し、「それはうちの担当じゃありません」「それは何とかじゃありません」「それはだめです」などということではなく、一生懸命このように聞いてやる。ほとんどが初期対応。先ほど言いました用地の話。用地がこじれるのも、ほとんど初期対応です。最初の頼み方が悪いなどと。それから、現場主義と最近盛んに言われますが、ただ現場へ行けばいいというものでもないけれども、それでも現場へ足を運ぶということを、今は嫌がってはだめです。

それから最後に、用地の問題は難しいと言いました。私たちが結局、ずっと長い公務員生活の中で、いよいよ困ったときに、皆さん、考えてみて。自分がこのような仕事を担当した、例えばどうしてもあそこのところへ、市が道をあげなければいけない、あるいは公共物を建てないといけないけれども、用地の交渉ができずに任されたけれども、できませんでした。「できませんでした」ということは、「私は仕事できません」ということを証明しているような話になるのだけれども、それから始まって、どうしてもこの人にあれを頼まなければいけない、これは頼まなければいけないという、それは法律に書いてあるので頼むというようなことでは結局ないということが、私たちの経験則です。要するに、どのような人間関係を幅広く作っていくかということ。そのような意味で、市町村といえますか、特に小さい町村はさらにそうですが、先ほど飯田市の公民館の話もしましたけれども、とにかくアフターファイブも使ったり、趣味ももちろんそうですが、絶対にアフターファイブも自分はやはり公務員。そうはいつても、仕方がないのです、公務員になってしまった以上。私は 365 日 24 時間、言ってみれば自由時間でもあるし、仕事であると私も思っています。とにかく、その人と、あの人も含めて、役所の中同士でも、「これはあいつに頼みたい」という。全ては、いかにそのようないい人間関係をたくさん持っているかどうか。もうこれだけ。あの職員は、一生懸命やはりやっているなど。

この間も退職した職員の話をしていたら、あるときにある民間会社に、「いやあ、よくやってくれている」とお礼を言ったら、「実は村長、何年か前、10 年くらい前に、泰阜村で何かしようと思ったときに、あの職員はものすごく何か一生懸命お世話になった」と。その者に聞いたら、もう覚えていなかったけれども、しかし、その人に一生懸命やってやっても何か得があったかどうかはわかりませんが、一生懸命骨を折ってやった。その人は、それをととても感じていて、そのために、あの人に頼まれたことはやってやらなければいけないと。世の中はこのようなことですね。結局皆さんが、自分の働く自治体で、いかに大勢の人と、「昨日のみ過ぎて嫌だな」と思っても、誘われたらやはり出て行って、酒を飲んで話をする。あるいは、アフターファイブで、「嫌だな」と思っても、土曜日に何かイベントがあれば、そこへ顔を出す。消防団は間違いなくやらなければいけないのだけれども、

例えば地域の行事に、大変だけれども、その仕事は関係ないけれども出ていく。その積み重ねが結局、将来の自分の仕事を支えることになるということを、どうぞ忘れずに働いていただきたいと思っています。

最後に、私はこれを役場の壁に貼ってあるのです。誰も職員は見えていないけれども、この中で第2条の、私は公務員が長いので、だいたい公務員というのは何の仕事をしているのかということがよくわかるのですが、これこれのように説明して、したがって、できませんという話。そうすると村長が、担当を呼んで、「これ、どうだった」と言うと、「これこれ、これこれこうで、できません」と。今はだいたい、町村長の多くは、私もそのような公務員から出身しているのだけれども、今は、まず結論から言えと。できるか、できないか。「できません」と言ったら、「理由は」と言うと、理由は聞く必要がないと、最近はそのようになっています。できない説明をするより、やる方法を考える公務員になっていただきたいと最後にお願い申し上げて、長いだらだらと話をしました。もし、1分、時間があるので、これだけは聞いておきたいという質問があれば、1人、2人、お受けしますけれども、よろしいですね。

それでは、以上、これから長い公務員人生になるかもしれません。このようなばかな上司の下で、このようなばかな村長のもとで働きたくないと思ったら、そこを去るか、自分がトップになるか、というくらいの気概を持って働いていただけたらと思っています。やはりそのくらいの気概がないと、これから大変ですよ。人口減少と言うけれども、それを言えば本当に、少子化で学校をどうするのか、子供たちをどのようにふやすか、ふやすことは無理かもしれませんが、どのようにするか。もう、やらないより、やるのがたくさんあるのですから、やる村、自治体にしたい。ということで、次世代を担う皆さんにご期待申し上げ、以上で話を終わらせていただきます。ありがとうございました。